

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	文學と人格：論説
Author(s)	沼川，福太
Citation	龍南會雜誌， 1 0 4： 1 9 - 2 8
Issue date	1904-02-20
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5655
Right	

文學と人格

沼川 福太

論

覆載の間蠢々として動き且働きつゝある幾億の吾人々類が、渴しては飲み饑えては食を求むる無智蒙昧の純然たる野蠻の境を脱して、禮法儀典の燦たる今日の文明に到達したる所以のものを考察するに、吾人は物質的文明と精神的文明との抱合によりて現出したるものなりと信するもの也。

試みに之を社會進化の形跡に徴せんか、往古の野蠻時代、則ち文明史上自然民族と稱せらるゝ人類が、水草を追うて處々に流轉せるや、天は之が爲めに衣食住の必要を感せしめて、彼等の小さき智慧は、やがて物質的文明の萌芽を發せしむに至りぬ。斯くて漸次その發展し擴大するに従つて、彼等がさきに恐怖し驚異したる自然力は、今や利用せられ支配せらるゝに至りぬ、而も是等物質的文明が人類に齎らせし賜は果して何物ぞ、曰く生存競争なり、曰く弱肉強食なり、而してかゝる慘憺たる活歴史は人類の苦悶呻吟を益々大ならんしめ、その慰藉を求めんとするの情を切なるに至らしめ、かくて文藝宗教の子葉は漸く其の芽を出し、精神的文明の花壇は爲に愈々其美を増しぬ。此に於てか知る、物質的文明と精神的文明とは其何れを缺如するも互に他方の存在を否定するものなるを。吾人は物質的文明なくして精神的文明を豫想すること能はずと雖も、同時に精神的文明の存在なくして物質的文明の進歩發達を致ふること能はざるなり。ケーオスの時代より石器時代に進み、鉄器時代

を畫して科學の新時代を作成したるものは、表面は物質的文明の賜なるが如き觀あれども、委細に
 攻究すれば其裏面には讚美すべき精神的文明の炳乎たるものあり。則ち今日吾人が誇る所の文明は
 如上の徑路を有して始めて創成せられたる也。内外の史乘を繙き見よ、禮法儀典の社會を粉飾せる
 現代文明の花壇中、いかなる花の一瓣か能く物質精神兩文明の親密なる握手によりて成されざる
 のぞ。嗚呼吾人が有する文明史は、やがて是れ一篇の兩文明が發展史たるなからんや。

二

人呼んで明治の新文明を以て古今絶倫の進歩なりとなすも、之を精神的の方面に見ば果して泰西の
 文明のずれに拮抗し得べしと云ふを得る乎、吾人の見る所によれば明治の新文明は皮相なる物質的
 文明なるのみ、頭重脚輕の病的文明なるのみ完全なる眞の文明は凡ての國民の脉搏を通じて傳べ
 れたるにあらざる也、而して斯の如き不完全なる文明(一)を形成したる所以のものは別に靈的生
 涯の大光明、天上に遍照するものある悟らざるが故也、哲學と宗教と文學とが、精神的食物として
 緊要缺ぐべからざるを知らざるが故也、其哲學と宗教との問題の如きは今暫く論せず、文學思想の
 欠乏、否殆んど其皆無なる、若しくは甚だ劣等なるは、彼等の人格をしてしかく野卑ならしむる所
 以の最大要因たらすんばあらず。彼等は固より書を解せざるにあらず、而も彼等の目的は、美的感
 想の満足、乃至精神上的の慰安を得るが爲めにあらずして、唯一種の野卑なる慾望を滿たさんとする
 のみ、根本義に於て大誤謬を抱ける也、然り而して彼等が文學に對して此の如き謬想を抱懷せるは
 要するに皮相なる物質的文明の風沙上に建てられたる文學なれば也、しかも吾人は何が故に讚美す

べき渴仰すべき文學をして、かくも墮落の深淵に陥れたるかを考ふるに及んで、今日の所謂文學者が實に之れが理由を双肩に擔荷せるものなることを斷言するに憚からざるもの也、而して又此理由を究盡すれば彼等文學者が崇高偉大なる人格を損せるに基けるを知る也、これ其發展の最も精神的文明の消長に懸るべき文學が、斯の如き悲境に陥りたる所以にして其頗る有價值なるの理由なりとす、而して同時に精神的文明を缺ける不具の文明の發現の偶然ならざるを證するもの也。

吾人をして是れより人格が如何に文學に大關係を有するか、人格を缺ける文學は何か故に眞文學の意義を滅却して却て社會の安寧幸福を亂すものとなるかに就て少しく觀察する所あらしめよ。

試みに見よ人は争ふて黄金を得んとするに汲々たり、されどバベルの塔を築かんとするも天に達するは果して何れの日ぞ。野心冢大名を轟かさんとするに是れ日も足らず、されど噴々たる名聲天下の耳目を聳動せんとするの時には、早くも彼を咒咀する惡魔來りて將にその成らんとするの名譽を傷く、何ぞかの爛熳煥發、腫々たる旭日と相映對して其精華を競へる萬朶の櫻花が、一旦疾風怪雨の襲來に逢うて、繚亂紛靡、泥裡僅かに香を止むるに似たるの酷しきや。更に看よ彼れより幾層超越したる者來りて、宛かも螢火點々として闇淡たる草間を照らし、暗黒なる林間を明かにするの際、月光忽ち雲間を洩れ出でたるが如きを、此時に當てや檮火提燈また何等の要なけむのみ。吾人は人生と闘ひ、社會の逆潮に掉して辛酸苦楚を嘗めつゝある間に光陰てふ惡魔は吾人が後へにありて、その冷かなる毒手を延ばし、荒く彼等の綠髪を握りて、黒闇々たる谷底に陥れんとはする也。あはれ吾人も亦江頭繫かざるの舟なる歟。早晚孤墳と化し去る草露の命なる歟。上帝は果して吾人をして

て號泣せしめんか爲めに生れしめたるものなるか、空々寂々として終らしめんとするものなる乎。あゝ何ぞ夫れ然らむ、吾人は飽迄神の人を生ずる其無意味ならざるを知る也。思ひ見よ、漫々たる宇宙の大海に浮泛する物象の水泡の中、彼の人類は何が故に獨り燦として虹霓の觀を呈するや、豈其意識に於て神の如き人格潜在するが爲めなるなからや。

然らば人格とは何ぞや、曰く明朗透徹なる眞智そのもの也、不變不易の眞理そのもの也、永久にして無窮なる正義そのもの也、神聖にして無邊なる大法そのもの也、人若し出でて自然の懷に入らば、杜鵑も啼いて來り、鴻雁麋鹿も起つて舞ふ、春ならざるに山花おのづから笑ひ、古い木も若葉の眉をつくる、月や銀燭の燦たるよりも明かに、一掬の溪泉は養老の水よりも甘し、以て神を暢はすべし。以て體を養ふべし、嗚呼自然の懷やこれ人格の化身におらずして何ぞ。夕陽西山の一角に沈みて風煙寥落、木魂に響きわたる黄昏の鐘、この時松杉參差たる寺院、石標縹々たる墓畔、青塚苔滑かにして石泉纖々として流れ、白楊謝して落葉離々として亂れたる邊に佇立すれば、吾人か神心超然として胸中塵埃なく、情淨無垢にして玲瓏玉の如く澄み、何等慰藉の琴線に觸るゝが如きの想あらむ、片月や墳墓や、これ人格の化身にあらずして何ぞ。兒童を見よ、彼は全身これ人格の結晶にあらずや、彼が呱呱の産聲は宛然人格の叫び也、彼が一身の全幅は如來清淨なる人格の身相也、彼が天真の語調、爛熳の動作は至る所人格の片影を齎らして、父之に依て終日の煩勞を忘れ、母之に依て終夜の無聊を慰る也。聞かずや先聖の叫びを『子供に還れ』と、『大人は小兒の心を失はざるにあり』とこれ吾人は人格を滅し去らば即ち人としての吾人は零なることを教へたる衷心の叫びならずや。夕陽將

に渡せんとする時、窓簾を肩にし手を這ひつゝ、奇譚なる野聲を放ちて面白く語ひつゝ歸れり。農夫を見て、誰か正純なる人格に接するの感なきを得る乎。家に歸りて沐浴一番、粗肴野菜に飽きて、愉快なる愛兒と戯るゝ彼等を見ては其の胸裡深く秘せられたる純美なる人格が、汝が懷に躍入するの思ひあらざるべき乎。汝が靈臺を開發し、怨恨を捨て、澁滯を去り、瞋恚を去らん時、新らしき生命と、新らしき希望と、新らしき活氣に滿てる光明と、皓々たる眞理とは汝が人格より發露するを覺ゆん、事茲に至らば汝が心中は汨々漫々として大海の百川を容れて餘りあるが如く、惡魔魑魅は頭を伏して汝が足下に拜跪せん、眞正の快樂は此所にあり、人生の滾々たる趣味は此所に潜めり、人格なる哉、人格なる哉、吾人之を説かんとするも能はず、口舌の盡す所にあらざれば也、人格や模糊として夕靄の如く、飄乎として幻影の如し、變現出沒、捕捉するに由なく、之を掴まんとて反悶するも、徒らに其苦を加ふるのみ、人格は彼が眼上にありて獨り閃々たる光輝を放つを見る。吾人若し人格あるものゝ群に入らんか、轉た靈域仙境に入るの感に打れざるを得ざらん。正義の念も同情の感も、苟も大道の眞面目は常に渠の人格より教へらるゝに非ずや、然り社會の激戦より逃れたる落武者は、獨り此聖域に於てのみ蘇生し復活し、再び清新なる活動を始むるを得る也。吾人は此に至りてチャンニングが『人たる名稱ほど尊貴高大なるものはあらず』との眞趣を了するを得たり。

以上に於て吾人は人格の如何なるものなるかを見、並せて人格なくして人たらんと欲するは恰かも其羽毛を染めて孔雀の群に入らんとする鴉の如くなるを説けり。是より吾人は人格と文學との相關

を論せんとはする也。

三

吾人は神話が宗教を胚み文學を産みたる時代あるを知れり、今や吾人は罪惡宗教を支配し、文學を分焼するの時に接す。思ふに神話は人格の反映にして罪惡は人格を無視したる符牒也。西歐文學の多く鉅匠を有し、大作を有する所以のものを考察一番せよ、吾人は古來の名篇雄作を味ふ毎に其紙背には社會の思潮を先導しつゝある烈々たる人格あり、其腦漿に靈火を点しつゝある炎々たる人格あるを看取するに難からざらむ、將たまた一代の思潮を左右したるが如き大偉人の著作に見よ、其所説や單純平坦にして動もすれば獨斷的に失するの跡あり、大哲學者の思索するが如くに周到綿密なるものにあらず、加之彼等の教へや論理を無視し常識に遠ざかり、矛盾や撞着や偏狹や到る處にこそ指點するを得べし。されど思へ此の如き紛亂粗笨の信仰を説くに熱誠天を焼く底の語調と、眞摯神を動かす態度とを以てするなり、而して世を動かし人を化するもの果して今の所謂哲學者、宗教家の諤々の辨堂々の論、眞に切實痛快を極むるものに及ばずとする乎、人は其精緻周匝なるに感することあらんも、人を教導し感化せしむるには一毫の微をも與ふる能はず。何人の愚か、粗笨無難にして矛盾偏頗なるカーライル、ユーゴー、トルストイ、ラスキン、エマーソン等の著書が、今の所謂大學者大哲學者の微に入り細に及ぶ明晰精到なる學説を滿載せる汗牛充棟の著作に若かずと云ふものあらんや。

文學の目約とは何ぞや、此前提を掲げ來る或は妥當を得ざるべし、然れどもシヨッパンハウエキは

、美觀善く人をして解脫せしむると云ひぬ、果して然らば美を對象とせる文學も亦能く人をして解脫せしむるの妙用を具せざるべからず、然り文學は善く忘我の理想境に導き、同情のヒューマニチヤを味はしむる也、人生の眞意義を解し靈魂の妙機に觸れしむる也、物質以上精神あり、肉体以上靈魂ある事を悟入せしむる也、一言以て之を蔽へば人間の本来を知らしむるにあらずして、之に動かしむる也、而して知らしむるは易く動かすは難し、最も困難なるものを標的とせる文學をして其目的を達せしめんと欲す、其手段や方法や一にして足らざるべし、曰く簡明にして旗幟の一目して認識せらるべきを要す、曰く熱誠眞摯の態度と勇往直進斃れて後止むの覺悟と抱負となかるべからず、曰く修辭曰く論理曰く何僕を更ふるも盡さざらむ、故に或者は美辭學を説き、或者は精緻なる文法を著し、或者は古人の名作を取り來りて批評論難して其作法を明にす、吾人思へらく此等を以て文學の能事終れりとすは當らずと、何となれば説者の眼中には、文學は人を動かすものなりとの本來の目的全く缺如たれば也、尤も吾人絶對的に此等のものを排斥し去るものにあらず、寧ろ其目的を遂行するに必要なものなることを認識するもの也。然れども記憶せよ、所詮如上の諸説は枝葉に過ぎずして、其大根本は實に崇高至玄の人格に俟たざるべからざることを、吾人は徒らに枝葉の小に苦心焦慮するの愚をなして、大幹根たる人格を閑却すべきにあらざる也、吾人は文學の裏面に人格の伏在せるを知らざるべからず、而も人格は直に文學にあらず、文學をして生命あらしめ活力あらしむる所以の根蒂たることを遺忘すべからざる也、然り人格の存在なからしめば、文學究極の目的は終に沒意義たらざるを得ざる也、苦心慘憺を経て屠龍の方法は完全具備したりとするも眞

龍は遂に在らず、文學の意義豈屠龍の法と同視すべきものならんや。

吾人はリユーシーグレーの詩を誦することを知む、此詩中に表はれたるウォルツウォルスの純潔な
る人格は、鉄腸石の如きものをして猶且子女を愛すの情、油然として起り來るを禁し得ざれば也。
吾人は彼のストウ夫人の『アンクル・トマス・スケピン』が何を以て北軍の爲めに十萬の援兵よりも優れ
りと稱せられしを知る、また吾人はホーソーンの『スカーレット・レター』が何が故に我等の悔改
者を生ぜしかを知る。之と共に山陽の日本外史が王政維新の原動力となりし因縁を覺ることを得べ
き也、吾人は露國の文豪トルストイ伯を讚美す、彼が終始一貫人道主義に殉せんとする熱烈なる人
格の其所作に顯はれたるを慕ふ也、殊に吾人はドレフユール事件起るや徹頭徹尾人道を主張し正義を
固執し、是が爲に名譽財産を失ひて國外に放逐せらるゝも敢て念となさず節を守つて毅然屈せざり
し寫實小説の泰斗たるエミル・ゾラを欣慕してやまず、彼等の文章は人をして時に或は高潔優美なら
しめ、或は宏壯俊烈ならしめ、或は靄々たる春光を藏せしむ。彼のナポレオン一世の威武全歐を震
駭し、列國累卵の崩るゝ如く普國の危機また旦夕に逼らんとす、當時の碩學フォイヒテ蹶然卷帙を投
して起ち、慨然として國民に訴へぬ、其聲や激烈其調や壯嚴、人道を説き博愛を論ず、誰か此辭に
激動せられざるものあらんや、かくて普國の人民勃然として戈を執て立ちぬ、彼が人格の響きは獨
乙人をして身命を抛ちて人道の戰士たらしめぬ、見よ彼が烈々たる人格は心靈に熱火を與へしめて
此の如き大活動を爲さしめしなり、あゝ誰か個人の方のかくも偉大なるを驚嘆せざるものぞ、され
ば思へ此の如き偉大なる感化や、熱誠の行動や、崇高至妙なる人格より溢出したる点滴なるを。

頭を回せば芭蕉の葉と無花果の影と娑婆たる曠原にオレンジ色の夕陽を浴びて牧羊嬉々たりし時より已に四千年、時に多少の優劣軒輊はあれども或は陰然に或は顯然に、一道の光明は炳耀として偉大なる人格より發射せられて、子子蠢爾たる人類を導き、社會進歩の大潮流は徐々として進み、崇高なる人格が産み出したる文學は天來の福音となり國民の師表となり慰藉となりて現實界に紅蓮白蓮の樂園を供しぬ、天下の絶唱に値すべき雄篇傑作を取て靜かにそが筆痕に對せよ、作者の偉大優美の人格は嚇々として壯麗眩ゆき許りなるを見ずや、吾人が有する文學史は實に偉大なる人格の血を以て書かれたる也、吾人現に之に參與す、乃更に一紙を加へて後昆に傳ふべきは理の當に然るべき所ならずや。

四

碩學カント嘗て最も高尚なる人間の意義を教へて曰く『神を知る事と自由を愛する事と不朽の命を慕ふ事此れ也』と今若し此規矩を持して世間百般の人に望まば、彼等は殆んど凡てに於て其人たる資格に落第すべき也。而して吾人は彼等を救済するに人格なる觀念を彼等の腦漿に印刻せしむるの必然的要件なることを云はむとす、之と同時に吾人は信義なく制裁なく克己なく勇氣なき社會の人心に、人格の偉大を感せしめ人格の福音を解せしめ、之を讚美せしめ之に向はしむるの大配劑を附與するものは、文學を措ひて他に何等のものにも求むること能はざるを絶叫するもの也。文學に依りて吾人は人格の消磨を支へバンに依りて其肉体の衰沈を防止す、文學が社會人心に貢獻するの甚大なる、是に於てか頗る驚嘆すべきものある也。

然らば起て、此尊重すべき文學にたづさはるの名譽を有し、社會人心の廓清を企圖すべき大任務を負へる文學者は果して健全なりや、非らず、彼等は些かにても貴むべき文學に關涉するの心を以て文學に向へるものにあらず、軒端に唸る蜂の巢乎、箱巢に怒る密蜂乎、凡べてが墓に終るとならばテニスンが胸裏の靈絃鳴つて聲ありし幽妙の理想境は、彼等の夢寐にだも解せざる處、朝に道を聽かば夕に死すとも可なりと孔夫子が説破せる天來のインスピレーションは彼等には全く馬耳東風のみ、彼等には社會の耳目を以て自から任し、率先以て社會救済を企畫するの霸氣なく、理想なく主義なし、何ぞ況んや人格をや。

人格なき社會と人格なき文學者とを坑にせよ、利己主義を去りて崇高なる人格に熱中する社會を作れよ、吾人青年は即ち其天職を負荷しつゝある者なる事を悟得し、此大旆の下に勇往奮迅するは最も美はしく最も勇敢なる行爲にあらずや吾人は此小論を了らむとするに際して敢て繰返す、物質的文明は精神的文明を離れて其保存と價值とを保續し得べきにあらず、故に精神的文明の代表者たる物質的文明と共に進歩發達せざるべからず、此言に反したる今の病的文明を表現せるは、偶々以て文學に人格の缺如せるを証するもの也、凡そ文學が精神的文明の代表者たるは、そが根蒂に人格の靈光を藏しをれば也。水面の月は決して水の畫さし影にあらず、社會の根底に一道の生氣を通し向上の理想を鼓吹し、人をしてカントの所謂人間の眞意義に近邇せしむるを庶幾するの眞文學大文學は、純潔無双なる人格の擁護者たるものと手に依てのみ成さるべきのみ。